

#### 第四項 南学会

はじめに

本項では、変法運動における学会の役割の1つの事例として湖南省に成立した南学会を取り上げる。すなわち、変法運動における湖南省の位置付けと、湖南省での変法運動における南学会の役割を明らかにして行きたい。

またひるがえって、湖南省の変法運動ならびに変法運動における南学会の意義を明らかにしたいと考える。以下、変法運動と湖南省、南学会の設置、南学会の機能と性格、南学会参加者、南学会の意義について、順次述べて行くこととする。

##### 1、変法運動と湖南省

湖南省における変法運動については、すでに多くの専論があるが、<sup>①</sup>今それをまとめる形で変法運動における湖南省の役割を明らかにして置きたい。

変法時期の学会の運動については、そのあらましについて第1章第1節で述べたが、<sup>②</sup>学会運動を地理的に見て行くなれば、直隸省、江蘇省、湖南省、広東省に主なかたよりが見られ、その中で最も学会の数の多いのは湖南省である。<sup>③</sup>

湖南省に何故学会が多くできたかと云えば、それは、第一に巡撫をはじめ変法派の官僚が湖南省に派遣され、湖南省の革新政治の中心となったことと、譚嗣同を中心とする湖南省の革新的な郷紳達がこれに呼応したことであろう。

すなわち梁啓超の『戊戌政変記』には、

「湖南は今まで守旧を称していた。だから西欧人が旅行をしているのを見ればこれを殺害した。また全省の電信の敷設や汽船の航行ができなかった。しかし、日清戦争の後、湖南の学政は、新学を土に課した。これで風気がようやく開けた。譚嗣同達は、皆に大義を下に倡え、全省がこの論に沾<sup>うきま</sup>され、議論は一変した。陳宝箴が湖南の巡撫になり、其の子陳三立が之を佐けた。黄遵憲が湖南の按察使となり江標の任が満ちると徐仁鎬がこれを継いで学政となった。梁啓超は招聘されて湖南時務学堂の総教習となり、湖南省の紳士譚嗣同、熊希齡等と相応和し、専ら実学を提唱し、土論を喚起し、地方自治政体を完成することを主義とした。今まさに、去年12月梁啓超は陳宝箴に一書を上した。」<sup>④</sup>

と見えており、湖南は元来保守的であったが、日清戦争後、革新的な学政江標が派遣されることにより、風気が開けたことが知られる。また革新的な官僚、陳宝箴が巡撫、黄遵憲が按察使となり、江標について徐仁鎬が、学政となり、湖南時務学堂には、中文総教習として梁啓超が招かれ、これに湖南省の紳士、譚嗣同、熊希齡などが呼応し、地方自治体の完成が意図されたことが知られるのである。

梁啓超の南学会叙<sup>⑤</sup>の中にも湖南省の人達の気風が語られている。また、このことについては、小

野川氏の『清末政治思想研究』では、「この頃湖南では、巡撫陳宝箴、学政江標、その後任徐仁鏞、署按察使黄遵憲を中心として、啓蒙の気運が動いていた。唐才常は江標に招かれて湘学报の編輯に当たり、熊希齡は湖南時務学堂の設立に努力していた。譚嗣同がさきに欧陽養齋に説いた算学館も、この年の初め漸くにして瀏陽の公費をもって設立されることになった。時務学堂は23年8月末に生徒を募集し中文総教習に梁啓超、西文総教習に李維格を招聘することが予定された。梁啓超は時務報の主筆として令名をうたわれ、李維格も時務報に関係して翻訳のことに当たっていた。」<sup>⑥</sup>と述べられており、湖南省に派遣された官僚と湖南省の郷紳の結合がはっきりと述べられている。

佐々木論文においても、湖南省の革新的な郷紳が湖南省に派遣された変法派の官僚と結合して、湖南省の変法運動にあずかって力があつたことと、変法派の官僚が中央で弾圧されると、湖南省においても、保守的な郷紳が力を得て、南学会等を弾圧している様子が描かれている。<sup>⑦</sup>

また、林能士氏は、「日清戦争後、湖南の人士は、彼等が元来有していた自負心と責任感で新思想の刺激を受け、全国の守旧派の中心から一変して、維新の積極的な推進者となった。また同時に、当時は少なからざる維新の志士が約せずして同地、長沙に群集し、湖南の一隅之地を藉りて、全国変法革新の拠点とした。ここにおいて、官紳の共同の指導のもとに湖南省において僅か2、3年の短かさの間に各種の新政が同時におこされ、戊戌変法運動期間中の全国で最も突出した最も進歩した一省となった。」<sup>⑧</sup>

と述べておられ、湖南省人が新思潮の刺激を受けて、守旧派の中心から維新の積極的な推進者となり、湖南省の官僚達と一緒に湖南を指導して、僅か2、3年の間に湖南省を全国でも最も進歩的な省と変えたと言われている。以上、小野川氏、佐々木氏、林氏の所説を通して、湖南省に派遣された官僚と湖南省の革新的な郷紳の結合による共同の働きにより、湖南の変法運動が推進されたことが知られる。このような湖南省の変法運動の中心となったのは南学会であった。

以下そのような役割を担った南学会について考察して行きたい。

## 2、南学会の設置

南学会についてはすでに諸先学によって述べられているが、<sup>⑨</sup>私なりにまとめて行きたい。

南学会の設置の年代及び場所については、皮錫瑞、年譜の光緒24年の條に、「……正月、南学会を長沙に創設した。……2月初1日に南学会の講義が開かれた。……」<sup>⑩</sup>とある。

さてこのような南学会の設置は、変法派の梁啓超が巡撫陳宝箴に南学会の構想を説いたことにはじまるといわれている。いま、『戊戌政変記』の「梁啓超上陳宝箴書」、「論湖南応弁之事」を通してそのことを明らかにして行きたい。すなわち彼はこの中で民智を伸ばすものとしての時務学堂と紳智を伸ばすものとしての南学会、官智を伸ばすものとしての課吏学堂について述べているが、順次見て行くことにする。

まず民権を伸ばさなければならないことが述べられており、「今日、民権を伸ばそうと欲するなら

ば、必ず民智を広めることをもって第一義としなければならない。湖南の官紳の多くは、民智を重んじている。ここに時務学堂が設けられた。その意図は至って良いものである。」<sup>⑪</sup>と見え、民権を伸ばすためには民智を広めることを第一義としていること、そのために湖南省の官紳が民智を重んじて、ここに時務学堂を作ったことが知られる。

ついで民智を伸ばし民権を興すことが述べられている。

「民権を興そうと欲するならば、よろしくまず紳権を興すべきである。紳権を興そうと欲するならば、よろしく学会を以って、その起点とすべきである。この誠は、中国に未だかつてない事であり、実に千古に易えることのできない理である。」<sup>⑫</sup>と見え、民権を興すためには、まず紳権を興すことが述べられて、紳権を興すにあたっては学会が起点となることが述べられている。

ついでさらに精しく紳権を起す意義、南学会の意義について述べている。

「今、中国の紳士に公けの事を行わせている。将来は官がそれをする方が良い。それでは何故紳士を用いるのか。紳士が民間の状況を良く知っているからである。すなわち上下の気持を通ずることができるからである。今その無学、無知は、官僚と同じである。その実態は、なお官の周知にはかなわない。それなら何のために紳士を用いるのか。紳士を用いんと欲するならば、必ず紳士に教えなければならない。紳士に教えるにはどうしたら良いか。これは学会があるのみである。先ず学会の役員が各々知っている所の品行方正で才識のある紳士を州県ごとに数人づつ皆省に集めて、南学会に入れれば良い。」<sup>⑬</sup>

とあり、公事を行なうには、紳士を使うべきであること、何故、紳士を使うべきかと云えば、彼等は、民間の情形をよく知っており、上下の気を通ずることができる。紳士を用いようと思うならば、まず紳士を教育しなければならない。紳士を教育する場所は、学会であり、まず学会の役員の知っている品行方正で才識のある紳士を州県ごとに数人づつ集め南学会に入れるべきだと言うのである。ここに南学会の意義が明らかにされているのである。

ついで南学会の内容に触れて次のように述べている。

「会には、広く書籍、図器を集め、講習の期間と課業を定めるべきである。長官が時々出席して、南学会を鼓舞すべきである。広く熟達している人を会長とする。中国の危亡の故、西洋の強盛となった理由を明らかにする。政治の本源を考え、弁事の條理を講ずる。或いは電報や公文書は、極秘なものを除いて南学会に交附し、議事を学習するのに役立てる。新政策で実施しようとするものは、ことごとく会中に交附し、それを実施すべきか否かを論議し、其の実施方法を決め、ついでその経費工面を議し、つぎにその用人の法を議せしめる。南学会では、日に読書し、日に事を治める。1年の後には会員の中で任じて議員となすべき者は半ば過ぎるであろう。これ等の会友のうちまた1年のちに酌留して総会議員とした者以外、分別して解散し、各州県の分会の議員とする。また別に新班を選んで總會にあって学習させる。」<sup>⑭</sup>

すなわち、南学会には、広く書籍、図器を集め、講期や課業を定め、中国の危亡、西洋の強盛となっ

た理由を明らかにし、政治の本源を考え、事を処理する條理を講究させるというのである。またこのために、公文書や、新政策などの可否を研究させ、日々に読書し、日々に事を治めさせ、議員となるべき者を養成するというのである。

さらにこれによって、地方自治がすすめられると次のように云うのである。

「紳智がすでに開かれれば、権限も又定まる。人々は既に危亡の故を知り、各々自から保つての道を思う。全省の人の聡明才力を合し久しい間考えれば、千方百計があり、一省の問題の処理を求め、一省の害を除き、一省の難を<sup>たす</sup>くことができ、未だ<sup>たす</sup>済うことができない者は<sup>ない</sup>」<sup>⑮</sup>

と述べており、南学会が省の自治の発展に役立つことを説いている。

以上梁啓超は紳智を開き紳権を伸ばすものとして南学会を構想した訳であるが、更に官智を開き、官権を伸ばす、課吏学堂について述べるのである。「すなわち、紳権はもとより当務の急である。しかし将来一切の事を処理しようとする時、官を<sup>たす</sup>めては、仕事を満足にすることができないのである。すなわち今日民智を開き、紳智を開こうと欲するならば官力に手を借りなければならないのである。しかし官はほとんど知らないのである。だから官智を開く事がまた万事の起点となるのである。官が貧しければ、官に民を愛することを望むことができないし、官が愚かであるならば、官に事を治めることを望むことはできないのだ。……だから課吏学堂を速やかに立てなければならない。」<sup>⑯</sup>と述べ、民智を開く紳智を開くといってもまず、官智を開くために課吏堂が必要だと述べている。

課吏学堂の内容については、つぎのように述べている。「課吏学堂の校長には巡撫が、副校長に司道が必ずならなければならない。その学堂は巡撫の役所の所に設け、毎日或いは1日、2日の間に便衣して堂に到り、課業を稽察し、随時教諭すべきである。……堂中には書籍を置き、地図を掛ける。各官が読む所の本は定められており、大体各国の條約、各国の歴史、政治、公法、農工商兵礦政の書である。」<sup>⑰</sup>とあり、課吏学堂での学習の模様を知ることが出来る。

以上、南学会を中心として時務学堂、課吏学堂についても簡見したが、南学会の意図を梁啓超は次のように述べている。

「此の書（梁啓超上陳宝箴一書、論湖南応弁之事）は、すなわち、湖南で改革を行う時の起点となるものであり、此の後の湖南省の事は、皆この書の次第によって之が行われたのである。南学会は全省新政の命脈であり、名は学会としているが、実に地方議会の規模を兼ねている。」<sup>⑱</sup>と述べられており、南学会が全省新政の命脈であり、地方議会の規模を有していることが知られる。

また梁啓超は、南学会の役割を次のように述べている。

「当時はまさに、ドイツ人は膠州を侵奪した時であり、列国の中国分割論が大いに起った。故に湖南の志士人々は亡国後の企図を作し、湖南の独立を保とうと思った。独立の挙は空言であってはならず、必ず人民に政術を学習させ、自治を実際にすることができて、然る後に行われるべ

きものであった。だからまず、南学会を作って自治を講習し、他日の基いとしようとしたのである。だからまさにこれにより、南部各省が湖南省を推して他日分割に遇ったとしても南中国が猶亡びないようにしたのである。すなわちこれが、この会が南学と名づけられた理由である。」<sup>(19)</sup>

と述べられており、中国分割の危機の中にあつて、湖南省を中心として南部数省が独立した時、その拠点となるのが南学会であつたことが知られる。また梁啓超の構想によれば、南学会は、衆議院であり、課吏堂は、貴族院、新政局は、中央政府ともなるべきものであつた。すなわち「南学会は実に衆議院の規模を隠かに寓し、課吏堂は、実に隠かに貴族院の規模を寓し、新政局は実に隠かに中央政府の規模を寓した」<sup>(20)</sup>と述べている。

さてこの様な構想を意図をもって設置された南学会は、どの様な、機能と性格を持っていたのだろうか。つぎにそれを明らかにして行きたい。

### 3、南学会の機能と性格

南学会の開始は、光緒24年（1898年）2月1日であるが、その性格と機能は、その章程に明らかにされている。

その章程には、南学会大概章程、南学会總會章程、南学会入会章程、南学会蔵書処章程、各府州県学署仿照南学会開講章程等がある。

今、これらの章程の検討を通して南学会の機能と性格を見て行きたい。

大概章程は、12条から成っており、その第1条には、

1、本学会は専ら知識を通じさせ、能力を揚げ、公益を拡充することをもって主義としている。

凡そ旧日有していたところのあとにとらわれる習慣、日和見的な意見は、この会に入ろうとする者は、つとめて取り除くようにしなければならない。<sup>(21)</sup>

とあり、南学会が知識を通じさせ、個人の能力や公益を拡げることが主義としていることが知られる。

第2条では、

1、本会の会友は、何郷の人であっても皆入れるべきである。会友には三種の別がある。1つに議事会友がある。皆、品行が正しく、学問があり、人望のある者をこれに充てる。凡そ会中の事務章程は均しく議事会友によって議定される。交會中は坐弁人が承弁する。1つに講論会友がある。定期に集講する。随時、難きを問う。1つに通信会友がある。遠方であり、通信に寄る。随時、酬答する。<sup>(22)</sup>

と述べられており、会員には議事会友、講論会友、通信会友があり、議事会友が事務章程を定め、日常的な業務には坐弁人が当っていることが知られる。

第3条には、

1、議事会友は、各々が現在議事を行っている。規模が定まるのを俟って、再び諸会友の中から



隨時公挙する。<sup>23</sup>

とあり、議事会友が議事にあたり、その選出の様子が知られる。

第4条には、

1、講論会友は、はかつて学問が深く弁説に長じている者を公挙する。そしてその人に講論を請う。講期は毎月4回とする。房、虚、昴、星の日を講論の時とする。その他としては、会友が開会すべき日に集って研究し、疑義や新理があれば、紙筆で相互に質疑応答する。<sup>24</sup>

とあり、月に4回の講演会と、会友達自身の研究会があったことがわかる。

第5条には、

1、本学会は、官・紳・士・庶の区別なくすでに会に籍があれば、ともに会友となり、一切平等であり、貴賤の別をはぶく。すなわち上下の気を通じ、閉ざしている習慣をやめる。凡そ入会しようとする者は、つとめてこの意味を知るべきである。<sup>25</sup>

とあり、官吏、郷紳、庶民の別なく平等であるべきこと、それにより、社会の有機的な一体化をはかっていることが知られる。

第6条には、

1、本会の入会者は、任意に若干の寄附をする。それは、会で図籍を購入したり、会を拡充する経費に当てられる。あるいは、新旧書籍の寄附を願うことも許される。<sup>26</sup>

とあり、若干の寄附が取られていたことが知られる。

第7条には、

1、本会の学術は専門を立てない。もし中西に通ずる深い精神があれば、著して論説とする。或いは図器を創造し、民生に益があれば、その論説は、本学会が選んで世に刊行する。其の図器は、西欧諸国の特許にならって特許状を与え授受させる。<sup>27</sup>

とあり、学問のあり方、図書の刊行、特許について触れている。

第8条には、

1、通信会友は、住居が遠くて会講に集えない者であり、もしこれが便利であると聴いて外府や外省から至るものがあれば、通信で連絡をする。自分から学んだ所は論文として帙とし、会中に郵送し、相互に検討してその中の優れた者を選んで世に刊行する。<sup>28</sup>

とあり、通信会友となる者は、住居の遠い者であり、その論文で優秀なものを刊行することが知られる。

第9条には、

1、会に現在、坐弁2人を設き、毎月給料を支払う。<sup>29</sup>

とあり、専従者に給料を支払うことになっているのがわかる。

ついで南学会總會章程を見て行くと、この章程は、28条あり、第1条には、

1、南学会は湖南省が開設する学会の起点となるものである。まさに、本学会をもって、湖南省

の学会の總會となすべきである。各府庁州県でこのあと続けて立てられている学会はみな分会とする。<sup>31</sup>

と見え、南学会が湖南省の学会の中心で總會であり、その他は分会となっていることが知られる。またその第5条には、

1、凡そ分会の紳士を董理する者は皆まず、本会の会籍に入らなければならない。……<sup>31</sup>とあり、分会の役員はまず本会の会員でなければならないことが知られる。第9条には、

1、凡そ経費を集めるには、官金の支出をはかるか、相談して一般の人に寄附を乞う。学会に關係する一切の事は、皆集っている役員の討議にまかせる。……<sup>32</sup>とあり、経費は官に依頼するか、寄附に仰ぐかしてまかなっていたことが伺われる。第20条には、

1、凡そ、農、工、商、礦、医、武備、水師、女学の各学会、学堂は、皆連合して分会となり、本会と關係を保つ。事があれば總會に照会し、教益を均しく霑すべきである。<sup>33</sup>とあり、分会と總會との關係が述べられている。第21条には、

1、学会は湖南を起点とし、将来は鄰省に通じさせ、これを外国に通じさせ、力量が益々広まる。<sup>34</sup>と述べられており、その発展が示唆されている。各府州県学四者仿照南学会開講章程には、

第1条に、1、南学会は總會であり、各府州県は分会であり決して別に名目を立ててはならない。<sup>35</sup>とあり、總會章程第1条と同様のことが伺われる。

第2条には、1、凡そ教官は、必ず南学会に入るべきである。<sup>36</sup>とあり、教官はすべて南学会員であることが知られる。南学会入会章程は、12条よりなるが、その第1条では、

1、凡そ入会する者は、まさに会友3人の熱心な保障による。それは実に學問に志を持つ者に係わっている。会中の會議による賛成者が過半数となれば入会を准す。<sup>37</sup>とあり、入会するには、会友の保証と南学会の公議での過半数の賛成者が必要であることがわかる。

第2条には、1、どんな仕事の者でも拘わない。但、徳、才、學芸において取るべき者がいたら均しく入会を准す。<sup>38</sup>

とあり、徳、才、学芸を兼備している者に入会をゆるしていることが知られる。

第5条には、

1、本会は、この時代の艱難を救済しようと考えている。もともと諸友が政治、学問を精しく研究することを欲する。京師大学堂のように、天、地、道、政、文、武、農、工、商、医等の科がある。一学を選んで習うべきである。概論を求めても、専門的に講求してもかまわない。<sup>39</sup>

とあり、中国を危亡より救うことが意図され、研究の分野が明示されている。

第6条には、

1、凡そ入会者は各々、銀若干兩を寄附すること、書籍を寄附してもよい。名前を紙に書きなさい。<sup>40</sup>

とあり、会友は寄附することになっていた事が知られる。

次に南学会蔵書処章程を見て行くが24条より成っている。

第1条には、

1、本会は蔵書処を設立する。凡そ古今有用の書は継続購入する。需要の多いものは、数冊を置いて有志の学を志す者の便をはかっており、ほしいままに各書を見ることができる。<sup>41</sup>

とあり、図書館を作り、古今有用と思われる書籍を多く置こうとしたことが知られ、需要の多い本については副本を用意して学習者の便宜をはかっていることが知られる。

南学会の分会について今、1、2、その具体的な例をあげて置く。

まず沅州にできた南学会分会の公啓の一部をあげて置く。

……北京に学会が設立され、親王や各大臣以下皆が入会して研究している例にならって、先きに省都に南学總會を設け、随時各府州県に赴いて南学会の分会を設け、推し広げようとしている……。<sup>42</sup>

と見え、北京に設立されたいわゆる学会に習って、湖南省においても、その省都、長沙に南学会の總會ができ、各府州県に分会が設けられている様子が伺われる。

また瀏陽羣明学会公致南学会書によれば、

「日清戦争後の分割と賠償金は千古未だ有らざるの奇禍であります。海外の強国である5、6ヶ国が協力して中国にたくらみを持っています。……徳ある者は孤立せず、努めて学ぶ者に望みがあることを願って、ここに羣明学会を設立致しました。……南学会の章程を読ましていただき、凡そ各府州県に設けられている学会は分会となすべきであります。……本学会もしたしく南学会に附属すべきであると相談して瀏陽南学分会と致しました。どうか章程に照らして証明書を発行して下さい。……」<sup>43</sup>

と見え、瀏陽羣明学会の設立の意図、さらに南学会分会となる要請をしていることが知られる。これに対して南学会は、南学總會覆瀏陽南学分会書を瀏陽南学分会に出している。それをまとめれば、お手紙拝見致しました。中国の削弱を憫い、学を興し以って、自強を思い、南学会章程に照ら



して、羣明学会を南学分会としようとしておられるとの事、諸君子の大局を規画せんとしておられることをつづきに見る思いがします。私共も全湖南省をよくしたいと願っています。南学会章程は総会をもって分会を総べ、分会をもって農・工・商・礦の諸会を総べ、全省を一つに連帶させるものです。万人が心を合わせ、一心となり、摩擦すれば、その晶光を発することができます。嘘を吹き飛ばせば、その愛力を生ずることができます。意う所は皆が連帶することのみです。<sup>44</sup>

とあり、ここに南学会を中心として全省が連帶することを訴えている。

また「湖南に新法が云われ、貴邑（瀏陽）の興算よりはじめて、湘郷の東山精舍、常德の徳山書院も起っています。省城に南学会を建てられてより、岳州、衡州、武岡の各地で踵を接して興り、風気は漸く開け広がっています」<sup>45</sup>

と述べており、湖南に新法が行われ、特に南学会が建てられてより、陸続として分会ができていくことが知られる。

南学会の組織については、『戊戌政変記』に「先ず巡撫によって、湖南省の紳士10人を選んで総会長とする。ついで此の10人が、各々の知っている所を挙げて、汲引して会員とする。州県ごとに必ず3人から10人になるようにする。各州県の義を好み国を愛する人を会員とする。」<sup>46</sup>とあり、総会長や、会員の勧誘方法ならびに半官的であることが知られる。

また南学会の活動については同じく『戊戌政変記』に、「会では7日毎に一演説が行われ、巡撫、学政が官吏を引率して会に臨んだ。黄遵憲、譚嗣同、梁啓超及び学長□□□（皮錫瑞）等が、輪日、中外の大勢、政治の原理、行政学などを演説した。もって、保教、愛国の熱心を激発させ、地方自治の気力を養成しようとした。半年後に会員の高等な者を選んで留めて省会の会員とした。その次の者は、各州県に帰し、一州一県の分会員とした。」<sup>47</sup>とあり、7日毎に行われた演説の模様、会員の選択の様子が伺われる。

また梁啓超が書いた『政変記』の譚嗣同伝には、

……皆君が率先して論を倡え計画したものであったが、南学会をもって最大の盛業としている。まさに南部諸省の志士が連帯して一つとなり相ともに愛国の理、救亡を求むの法を講じた。まず湖南省より起り、実に学会と地方議会の規模を兼ねていた。地方において、有事に公議して処置して行くのがこの議会の意図したことであった。7日ごとに衆が大いに集り、講学した。万国の大勢及び政学の原理を演説するのがこの学会の意図である。時に君は、実に学長と同じ仕事をした。演説の事に任じ、会毎に集る者千数百人であった。君、慷慨して天下の事を論じ、聞く者で感動しない者はなかった。故に湖南全省の風気大いに開け、君の功は多い。<sup>48</sup>

とあり、ここでも盛んに講演が行われていることが伺われる。即ち王爾敏氏も云われるように講演は、南学会の中心的活動であった。<sup>49</sup>

いま、湘報類纂により、その様子を見て行くこととする。

陳宝箴は、第1次と第2次の2回講義をしており、それぞれ「学を為すには、必ず先ず志を立てるの論」、「キリスト教を必ずしも攻撃せずということとも兼ねて周漢の事に及んで論ず」<sup>51</sup>という題である。

黄遵憲は、1次と2次において、「政体、公私人において自ら其の事を任すの論」<sup>52</sup>と題して講演しているが、その中で「諸君に求むる所は、その身を自治し、その郷を自治することだけだ」<sup>53</sup>そうすれば「官民上下が同心、同徳となり、連合の力を以て群衆の謀の益を収め、その郷を生かす。」<sup>54</sup>と述べている。

鄒代鈞が第2次の講義で「輿地経緯度の理を論ず」<sup>55</sup>と題して述べており、楊自超は「地球の太陽を繞るを論ず」<sup>56</sup>と題して同様に第2次の講義をしている。

歐陽節吾は「義利を弁じて自ら恥有るを論ず」<sup>57</sup>と題して第4次の講義をしている。

李維格は、第5次の講義で、「訳書においては、4つの弊害を除くべきであることを論ず」<sup>58</sup>の講演をしている。

向味秋は、沅州府の南学会分会において、「孔教の仁を以て体となし、恕を以て用と為すことを論ず」<sup>59</sup>の講演をしている。

曾広鈞は、第14次講義において「礦山を開くのに資本を惜しんではないことを論ず」<sup>60</sup>という題で話している。

喬樹楠は、「公利、私利の分を論ず」<sup>61</sup>という講義をしている。

譚嗣同は4回講義しているが、第1次の講義においては、「中国の情勢の危急であることを論ず」<sup>62</sup>という題で、

「……溯れば、道光以後、通商の諸事において宜しきを失い、今日の衰弱の原因を釀成するに至った。……諸君はもとより、忠君、愛国の忱を懐いていると思うが必ずともに此の恥を深く思うことを諒とせよ。だから願うことは、諸君と今日の中国の危急な情勢を講明し、共にあい勉め、実学を学び、もって危急に至った状況から中国を、救おうではないか」<sup>63</sup>と述べており、実学を学んで中国を危機的状況から救おうとしていることが知られる。

また第2回目は第2次の講義であり、「今日の西学は皆中国の古学派が有していたことを論ず」<sup>64</sup>という題で行い、「……絶大な素王の學術は、孔子によって開かれた。……けだし、近來のいわゆる新学や新理は、一つとしてここに萌芽していないものはない。これからすれば吾が聖教は精微にして博大であり、古今中外越えることのできない所となっている。また彼此両方をくらべれば、謀らずも合っている。すなわち地球の公理である。……諸君、まずこの理を講明してから吾が身の属している地球の事を知ろうではないか……」<sup>65</sup>と述べており、西学も中国の儒学をもとにしているということを実感した上で西学を学ぼうと呼びかけている。

第3回目は第5次の講義であり、「学者はまさに人に驕ってはならないことを論ず」<sup>66</sup>という題で講義をしており、その中で「……私が今日、くりかえし驕の一字を戒めているのは、学会において重

要なのは学ぶことであり、学ぶ者が一たび驕れば学を為すことができないからであり、これが第一の驕るという字を去ることの必要性である。もし驕ることがないならば、まさに人の長を師とし、おのずからその学問を成就することができる。学があれば、国は亡びることはない」<sup>66</sup>と述べており、驕ることをいましめている。

第4回目は第8次の講義であり、「全体学を論ず」<sup>67</sup>と題して行って居り、生理学の話であるが、その最後に「……今、人々は皆この理を明らかにしようとしており、皆が界城を破除し、出でて事に任じようとするならば、学会でなければならぬ。故に今日の救亡、保命のために至急行なわなければならない上策としては学会に過ぎるものはない。私は、各府州県が有している所の書院を概ね改めて学堂、学会となし、一方においては人材を養成し、一方においては、衆力を連合して、官民・上下が通じて一氣となり、ともに維持し、相連繫し、心を合わせ、ともに謀れば、内患はなくなり、全体の人々が安ずることができる。」<sup>68</sup>と述べており、学堂、学会によって、人材を養成し、衆力を連合して、中国の危機を克服しようとしたことが知られる。

学長、皮錫瑞は第1次から第12次まで12回講義をしている。まずその題目のみをあげておく。

第1次講義 学会を立て講学するの宗旨を論ず。<sup>69</sup>

第2次講義 続けて講学を論ず。<sup>70</sup>

第3次講義 朱、陸の異同が分別、義利に帰するのを論ず。<sup>71</sup>

第4次講義 学者は道学の悪口を云ってはならないことを論ず。<sup>72</sup>

第5次講義 交渉の公理を論ず。<sup>73</sup>

第6次講義 種、教を保つはひとしく必ずまず民智を開かなければならないことを論ず。<sup>74</sup>

第7次講義 聖門の4科の学を論ず。<sup>75</sup>

第8次講義 孔子の創教には改制がある事を論ず。<sup>76</sup>

第9次講義 変らざるものは道であり必ず変わるものは法であることを論ず。<sup>77</sup>

第10次講義 勝朝、昭代の興亡の原因を論ず。<sup>78</sup>

第11次講義 変法は天地の気運がしからしめるということを論ず。<sup>79</sup>

第12次講義 西洋人が来華して通商、宣教することは暗に抵抗を求める法になることになると論ず。<sup>80</sup>

ついでその主な点のみに触れて置く。

まず第1次の講義において、「湖南の官紳は、共に議して南学会を開いた、民智を開通し、人材を培植するためである。今はじめての開講においては、あえて学会を立て講学するの宗旨を取り上げた」<sup>81</sup>と南学会の主旨を述べている。

第6次の講義においては「今時事は危険である。旅順、大建湾にはすでにロシアの旗が立てられた。英国、仏国みな変局があると聞いている。中国の400兆人はまさに滅種、滅教のおそれにある。湖南が学会を開いたのは、実に急いで民智を開こうとしたからであり、万已むを得ない計である。……もっ

とも急いでしなければならないものは、保種と保教である。……」<sup>82</sup>と述べており、中国分割をふせぎ、保種、保教をするために民智を開き学会を開いていることが伺われる。

第12次の講義においては、「……西欧人が来るのが我々に大きな害があるというのは、充分熟した議論ではない。西欧人が来るのは、我々に無害なのである。まだ必然とはなっていない。彼等は、来て通商、宣教をするに過ぎない。通商は我等の利を奪い、宣教は我が国の人達を誘う。すでにはっきりと、これを阻み、来ないようにすることはできない。ここに暗にこれに抵抗する方法を求めるのである。湖南の人は、西欧人を甚だ惡み、その商品を甚だ愛している。毎年流出する銀錢はすくなくない。いま通商が近くなって、西欧の商品が更に多くなっている。どうしてこの漏れを塞いで、通商に抵抗するか。ここに商学会が開かれて、湖南の産出物や製造物について研究し、将来何処に売れるか、利益が何倍あがるかを研究している」<sup>83</sup>と述べられており、外国との重商上、中国のとるべき道を研究しているのがわかる。

最後にこれらの南学会の活動にとってあずかって力のあったのはその機関紙『湘報』であった。すなわち、活動の宣伝、深化には欠くべからざる武具であったのである。今その章程により、そのあらましを見て行く。

湘報刊章程は、刊報凡例13条と弁事凡例19条からなっている。前者の第1条には、

- 1、本館は、機器と鉛字を購入して仕事をしている。均しく同志から資金を集め行なっている。専ら風氣を開き、見聞を開拓するのを主となしている。これを藉りて生計を立てようというのではない。撫憲が毎年経費をこころよく寄附してくださっている。だから非常に安い値段にして、僅かに紙の代金だけを取っている。それは貴賤、貧富、士、農、工、商の別なく皆に湘報を見てもらいたいからである。<sup>84</sup>

とあり、風氣を開き、見聞を拓くためにすべての人に『湘報』を見せたいと願っていることが知られる。

またその9条には、

- 1、本報は、学堂、学会が連合して、一氣となしている。……<sup>85</sup>

とあり、湖南省の各学堂、各学会を連合させる意図があったことが知られる。

以上、南学会の機能と性格についてその章程や、『戊戌政変記』、『湘報類纂』、『譚嗣同全集』などを通して述べて来たが、次に南学会の参加者について考察して行きたい。

#### 4、南学会参加者

皮錫瑞年譜の光緒24年の条には、

「徳宗は、銳意、新政を行なった。湖南省はすでに新聞社を設け、学校を興した。黄遵憲は長宝道と署臬司に任せられ、江標と徐仁鎬が相繼いで学政となった。正月更に陳宝箴とその子三立、熊希齡、譚嗣同、戴徳誠の諸氏が長沙に南学会を創設した。貴方（皮錫瑞）は湖南省に居て学長に任せられ、

学術、政教、天文、輿地の四門に分かれ、貴方が学術を主講し、黄遵憲が政教を講じ、譚嗣同は天文を講じ、鄒代鈞が地理を講じた」<sup>88</sup>とあり、湖南省の変法運動は、黄遵憲、江標、徐仁鏞などの官僚によって着手され、その援助のもとに陳宝箴、陳三立、熊希齡、譚嗣同、戴德誠等によって南学会が設立され、役員としては、皮錫瑞が学長、学術の主講となり、黄遵憲が政教を講じ、譚嗣同が天文を講じ、鄒代鈞が地理を講じたことが知られる。

その他の参加者としては、唐才常、畢永年、樊錐、易肅、黄膺などがおり、坐弁人となったのは、戴德誠と黄膺であった。講演者となったものには、前述の4人の役員の外に陳宝箴、楊自超、歐陽中鵠、李維格、向味秋（本名不詳）、曾広鈞、喬樹楠などがあった。

また南学会の講義に集った者の数については、同じく皮錫瑞年譜の24年の条に、「2月初1日、学会開講し、官、紳、士、民の集る者、300余人」<sup>89</sup>とあり、最初の会には300 余名が集ったことが知られる。

また『戊戌政変記』の『譚嗣同伝』によれば、「会ごとに集る者、千数百人」<sup>90</sup>とあり、会ごとに千数百人が集っていたことが知られる。

以上が南学会の援助者、創立者、役員、坐弁人、講演者、一般参加者のあらましであるが、つぎに、それを表示し、その階層構成を見て行く。

会中の役割	氏 名	出 身	官 職（又はそれに代る資格等）
学長、主講	皮 錫 瑞	湖 南	江西南昌經訓書院主講
	張 通 典	湖 南	知 県
	秦 力 山	湖 南	補県学生
講 演 者	陳 宝 箴	江 西	湖南巡撫
政 教	黄 遵 憲	広 東	湖南塩法道
	梁 啓 超	広 東	举 人
	陳 三 立	江 西	吏部主事
天 文	熊 希 齡	湖 南	翰林院庶吉士、時務学堂教習、提調
	譚 嗣 同	湖 南	候補知府
	戴 德 誠	湖 南	候選訓導
坐 弁 人	唐 才 常	湖 南	拔貢生
	江 標	江 蘇	学 政
	徐 仁 鏞	河 北	学 政
地 理	鄒 代 鈞	湖 南	候補知県
	畢 永 年	湖 南	拔貢生
	樊 錐	湖 南	拔貢生



坐 弁 人	易 鼎	湖 南	
	黄 膺		
	楊 自 超		知 県
講 演 者	欧 陽 中 鵠	湖 南	舎 人
講 演 者	李 維 格	江 蘇	監 生
講 演 者	向 味 秋		山 長
講 演 者	曾 広 鈞	湖 南	翰林院編修
講 演 者	喬 樹 楠	四 川	刑部主事

いま判明しているこれらの参加者の指導者層官職を明らかにすれば、巡撫（従2品）1名、道員（正4品）1人、候補知府（正4品）1人、主事（正6品）2名、知県（正6品）2名、学政（正7品）2人、翰林院編修（正7品）1名、舎人（従7品）1人、候選訓導（従8品）1人、翰林院庶吉1名、挙人1名、拔貢生3名、生員2名、書院山長1名、教習1名、不明2名である。

以上の参加者の階層構成を見れば、巡撫を最高としているが、4品まで3人であり、ほとんどが正6品以下の官僚であることがわかる。この外に、千数百人にのぼる郷紳層が存在していた訳である。

つぎに出身者について見て行く。湖南省出身者が半数近くの13人であり、江蘇2人、江西2人、広東2人、四川1人、河北1人、不明3人であり、ここからも、変法派の革新的な官僚の呼びかけに応じた譚嗣同を中心とする湖南の革新的な郷紳層の力強い立ち上がりが見られる。そして更にこれに応じた千数百人の湖南の郷紳が立ち上がったのは壮観であったと思われる。

最後にこれらの参加者の派別を見て行く。指導的部分はいままで見た限りでは、変法中間派の康梁系<sup>⑨①</sup>と、変法左派の譚嗣同系<sup>⑨②</sup>によって構成されていることがわかる。その外千数百人の半官的で平等主義を理解した開明的な郷紳層の参加が見られた。

康梁系や譚嗣同系は、いずれも開明的な地主が転化して資本家となろうとしているのを代表しており、康梁系は、ある程度、民主的な権利を取得しようとしていた。譚嗣同系は官僚の気質に比較的なじんでおらず、礦務に着手して大きな利益を得ようとしており、思想上にあっては康梁系よりラディカルであった。<sup>⑨③</sup>

以上から見る限り、南学会は湖南省のみならず全国の変法運動における最も急進的な学会の一つであったと見る事ができる。<sup>⑨④</sup>

つぎに、南学会の意義について考察したい。

## 5、南学会の意義

今まで考察して来たように、南学会は、非常に大きな規模を持ち半官的でもあり、急進的であったが、やがて守旧派の官紳の反対に遭遇することになる。

すなわち、蘇輿によって、「邵陽士民驅樊錐告白」、「駁南学分会章程條議」、「摘駁樊錐開誠篇中語

尤悖謬者」が書かれた。

まず、「邵陽士民驅逐乱民樊鍾告白」では、「拔貢生の樊鍾が邪説を主唱し、聖教に背叛し、倫常を敗滅し、世を惑わし、民をあざむいて村中の人達を尽く禽獣に変えて快感を味わおうとした。……まさに乱民樊鍾を驅逐して出境させ、永久にその在籍を許容しない……」<sup>95</sup>と述べられている。

駁南学分会章程條議においては6条にわたって、その章程が邪説であるときめつけている。<sup>96</sup>最後の文章では、樊鍾が書いた「開誠篇」の批判をしている。<sup>97</sup>

これを契機にしてこれ以後、守旧派の反対がいよいよ高まり、政変後、御史黄均隆の疏請により、8月21日上諭が出された。

それをあらましまとめれば張之洞に電報を寄せ、湖南省城に新設された南学会、保衛局等の名目はすぐにすべて撤廃するように、会が所有している学約、界約、割記、答問等の書は一律に銷毀し、それらを根絶するようにと<sup>98</sup>あらまし述べられており、南学会等が禁止されたことが知られる。

しかし、南学会の影響は大きく、湖南省には南学会の設立以後、多くの学会、学堂、報（新聞）が作られ、すでに章程で明らかにしたように、省内すべての学会、学堂はその分会となった。また南学会から、講師が各学会に派遣され、このような意味からも、南学会は、湖南省の変法運動に指導的な役割を果し、たとえそれが、弾圧されても、南学会の影響は、湖南省に残存し、やがて義和団運動と時を同じうして唐才常を中心として自立軍起義が計画された。<sup>99</sup>このような意味から南学会は、湖南省の変法運動に大きな役割を果したばかりでなく、また変法運動全体に対しても大きな役割を果し、革命運動にも影響を与えたと云えるであろう。

また前述もしたように、湖南省は中国全省の中で最も学会の数が多く、首都北京と、外人の影響が強い上海に設立された学会が、始めて、中国に土着化して変法の実をあげたものであったと考えられ、その中心をなしたのが南学会であったと云える。

だから南学会こそ、変法派の志士達が、志した土着化した学会のあり様の一つの典型的なパターンであったろうと考えられる。そしてこれは湖南省の人々に大きな影響を与え、王爾敏氏も云われているように、唐才常、黄興、宋教仁、蔡鍔等の多くの革命人を輩出した。<sup>100</sup>

おわりに

以上により、南学会は、議会と学会とを一つにした半官、半民の組織であり、湖南省の変法運動に中心的指導的な役割を果したことが知られる。

また湖南省の変法運動は各地の変法運動の中でも最も先進的で充実したものであり、地域に根を降したものの典型であり、変法運動のあるべき方向の極限をさし示しており、それが後の革命運動に生かされて行ったといっても過言ではないであろう。

そして、湖南の変法運動の中心が南学会である事を考える時、南学会は変法運動の推進に一つの中心の大きな力となったと云えよう。